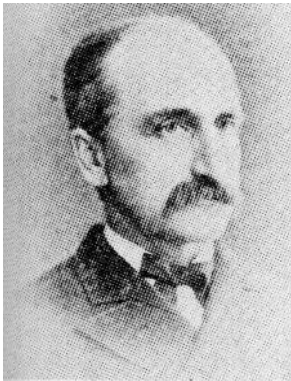


◆テニス導入の先進校同志社

1875年(明治8年)11月29日、新島襄により同志社英学校が開校された。1876年(明治9年)10月に京都御苑内旧柳原邸に女子塾を開設し、翌年8月に同志社女学校と改称したが、当時の初代校長 A.J.スタークウエザーはテニスを女生徒に教授した。これは日本の学校でテニスが体育として取り上げられた最初と思われる。



102. D・C・グリーン (1843~1913)

明治10年代後半には、すでにD.C.グリーンによって教員・宣教師が利用できるようなテニスコートが整備され、学生も利用していた。

テニスの歴史に少しだけ触れてみると、フランスでジュ・ド・ポームという名で発祥し、フランス革命以後衰退してイギリスに渡った。1877年に第1回ウィンブルドン大会が開催された。同志社へ派遣されてきた宣教師はアメリカニューイングランドを本拠地としていたから、イギリスで普及したテニスはすぐにアメリカに伝わり、それを学んだ宣教師達が日本に持ち込んだことになる。同志社にテニスが紹介されたのはイギリスで普及し始めてからわずか4、5年後ということになり、このスピードは驚異的な速さである。

明治30年代(1897年以降)に入ってからテニスを組織だったクラブ活動のレベルまで高めたのは、安部磯雄である。この人物は、本学テニス部の祖といってもいいだろう。

安部磯雄は、1879年(明治12年)に同志社に進学した。同志社神学校を卒業後、数年伝道師として活動をしてから1891年(明治24年)に米国ハートフォード神学校に留学した。アメリカ留学の後、引き続き英国にも留学してから同志社中学の教頭として迎えられた。

同志社中学校教頭時代に、神学館(クラーク記念館)の東側にテニスコートを設け、教職員学生を指導し、有志のクラブを組織して盛んにテニスを行なった。



195. 安部磯雄第二代牧師 (1865~1949)

安部磯雄が退職後、テニスは一時停滞していたが、1904(明治37年)年に四寮裏(アーモスト館)付近にも新コートを作って再び盛んに練習を始めるようになった。

同志社新聞		第三號	
(七) 明治三十三年八月二日		(可認郵便第三號對特許)	
● 志社運動部規則			
第一條 目的 本會ノ目的ハ同志社各學校ノ教職員生徒一致融和シテ繼續的團體トナリ各紳士的品性ヲ健全ナル身軀ヲ發展シテ以テ社會ノ福利ヲ期ス	第二條 名稱 本會ヲ同志社(會)ト稱ス	第三條 會日 資格 本會會員ハ左ノ二種トス	特別會員
特別會員ハ同志社各學校ノ教職員ヨリモノトス	正會員	第四條 組織 本會ヲ左ノ諸部ニ分ツ	第五條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
第五條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第六條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第七條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第八條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
第九條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十一條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十二條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
第十三條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十四條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十五條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十六條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
第十七條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十八條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第十九條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク	第二十條 役員 本會ニ左ノ役員ヲ置ク



この直後、1905年(明治38年)1月23日に、同志社運動部規則が制定された。これを受け、テニス、剣術、柔道、野球、フットボール、端艇の6つの運動部が学校公認の団体と認定され、この1905年(明治38年)を正式なテニス部創部年と定めた。

1909年(明治42年)、彰栄館北運動場の新コートで庭球部秋季庭球大会が開催された。1910年(明治43年)には、グラウンドがさらに拡張され(第2次運動場拡張工事)公会堂裏に2つのコートが作られた。この年から学内庭球大会に他学校の選手を招待する試みが始められた。招待した学校は染職、花園、一中、商業、師範、医専、佛大、三高であった。

1912年(大正元年)4月、専門学校令により神学校と専門学校が合併し、大学として新体制となった。第3次運動場拡張によって新たにハリス理化学館北側にグラウンドが設けられた。この年、対京都師範戦に6-4で圧勝し、対膳所中学戦で6-2、対滋賀師範戦では5-1で大勝し

た。第12回校内庭球大会が開催。本学の岩室・島崎組がメダル獲得。遠征に行き、花園大学に6-2、明星商業5-3、御影師範5-2、桃中に全勝。【写真：1909年(明治42年)の庭球部】

1914年には、同志社女学校が、第1回三女学校連合庭球会に参加した。



1922年(大正11年)アーモスト大学学生代表のシュアート・バートン・ニコルスが来日。1923年(大正12年)にはシャイベリー、ホールの両教授の指導を得て、急速に技術レベルが向上し、長足の進歩を遂げるにいたった。当時、ボールは高価で年間2000円足らずの部費では足らず、アルバイトに行きセットボールを手にいれ、布が見えるまで使用していた。

【S.B.ニコルス】

アーモストからの第1回派遣代表学生で本学の籠球部、野球部、競技部、さらに英語クラブまで指導し学生に慕われ、大きな影響を与えた。しばらくして本国に帰国後、まもなく25歳の若さで急逝。

遺族が愛息の記念館設立のため寄付を申し出て、1935年(昭和10年)同志社にアーモスト館の設立が実現した。



【手前左前衛はS.B.ニコルス 1924年啓明館東側テニスコート於】

その頃、大学図書館の東側に2面あったテニスコートは小石混じりだった。

1924年(大正13年)、同志社大学体育会が設立され発会式が開催された。

1927年(昭和2年)、大学庭球部役員が決定した。部長は山田貞夫教授、理事に今井和夫、委員に射延治郎となった。



【佐藤俵太郎と安部民雄(右)】

・1930年(昭和5年)、第1回全日本選手権で優勝した日本代表の安部民雄と佐藤俵太郎が本学を訪れた。当時主将であった川廷善一郎が取り持つ縁で彼らが同志社へ来てくれた。大工原総長、日野予科長、シャイベリー氏、山田庭球部長以下30名で学校の公賓として出迎えた。安部民雄氏は安部磯雄氏の子息で、神学部教授シャイベリーとは旧知の間柄である。同志社チャペルにてデビスカップ戦に関する講演を行った。その後、本学テニスコート於、模範試合をした。当時の同志社会報には「安部磯雄先生は当時、自らラケットを握り同志社におけるテニスの開祖として活躍せられ、今、御子息を母校に迎えるは何たる機縁であろう」と記している。

◆立教大学対抗戦の始まり

・1928年(昭和3年)9月26、27日に本学(京都)において第1回对立教大学との対抗戦が行われた。4-5で惜敗。(選手:古川・隠岐、沖・八木、川廷・篠瀬、八木、隠岐、古川、田村、沖、篠瀬)

「特筆すべき光輝であることは、この記念すべき第1回立教戦の開会式に新島八重子様が登場され、あいさつの言葉を述べてくださったことです。」と後に監督を務められた島岡博次氏(昭和21年卒)が100年史の寄稿の中で語られております。

東京から立教大学の選手団が到着。くしくも昭和天皇の即位の儀、御大典が京都御所で執り行われていた。古来の儀式、御大典で沸き返っている町の様子が若い学生らにはたいそう珍しかった。



【1928年(昭和3年)第1回立教大学対抗戦 同志社チャペル前於て】100周年記念誌より

- ・1929年(昭和4年)第2回对立教大学対抗戦が東京池袋に於いて開催された。主将は川廷善一郎(1930年、昭和5年卒)同志社は敗れた。
- ・1930年(昭和5年)第3回对立教大学対抗戦が京都に於いて開催された。同志社は4-5で惜敗。
- ・1931年(昭和6年)(第4回对立教大学対抗戦)第1回学友会全同志社対全立教大学定期戦東京池袋に於いて開催5-4で勝利。

テニスにならって、オール立教対オール同志社と、全部の部の対抗戦を行うため汽車3両を借り切って同志社勢が東上した。と、落合保之氏(1933年 昭和8年卒)の回想談が残っている。

- ・1932年(昭和7年)(第5回对立教大学対抗戦)第2回学友会全同志社対全立教大学定期戦本学(京都)に於いて開催5-4で勝利。

第2回学友会立教大学との交流戦について、同志社校友会同窓会報65号では次のように記されている。

「公明至純なる運動並びに文芸精神の神聖を尊重し以って帝国学生精神の振作を計るため両大学学友会の交換競技をなし、優劣、勝負を超越し有終の美を完成せんとして昨年第1回交換大会を東京に開き本年第2回を京都に開いた。6月17日午前8時半より本学グラウンドで挙行された。この日折からの梅雨も上がり、絶好のコンディション、両大学の選手500名は白衣のユニホームに身を固めてグラウンドに勢揃いした。大会は堀宗教主任の祈祷を以って始まり、パレット博士の聖書朗読、総長の式辞あり、

午前9時テニスコートにおけるダブルス、学生会館における卓球がそれぞれ競技を開始した。

但し、同志社の母新島八重子刀自が1932年(昭和7年)6月14日に永眠され、17日は葬儀日にあたり、葬儀時間中は校内のあらゆる競技は中止して、両校の学生はグラウンドに直立し、式場に向って黙祷し弔意を表した。本学校庭を中心に庭球、卓球、水泳、野球、剣道、龍球、蹴球の七種目と英語弁論大会が行われたが勝敗は両軍相半ばし、野球、剣道、蹴球は同志社に、卓球、水泳、龍球は立教に凱歌が上り、第1日を終わる。絶好のコンデシ

ョンに恵まれて観衆が殺到し、華やかな応援に彩られつつ終日朗らかな交歓が続けられた。」というエピソードが残っている。

立教大学との対抗戦は本学テニス部における伝統的な定期対抗戦となった。戦時下で3年間の中断はあったが、現在まで続いている。2018年(平成30年)12月(立教新座)開催で第88回を数えた。対戦成績は男子が同志社の46勝40敗(2荒天中止)。女子対抗戦は2000年より始まり、2018年で第19回を数える。女子対戦成績は9勝10敗。



故新島八重子刀自





【前列左より落合、シャイベリー子息、古川、シャイベリー先生、八木、木畑】100周年記念誌より
ここで、軟式と硬式テニスについて、どのような変遷を辿ったのか、考察してみよう。

硬式ボールは高価で輸入品であったためなかなか手に入るものではなかった。1890年(明治23年)に日本最初のゴム会社がテニス用ゴムボール(M球)の製造に成功し、これ以降日本独自の軟球を使ったテニスが普及する。本学にも紹介され、安価で簡便なスポーツとして硬球に代わり軟球が教員・生徒のあいだに普及していった。

1920年(大正9年)東京高商が硬式に転じ、相次ぎ明治、法政、早稲田、神戸高商、関学が硬式に転向。

しかし、本学庭球部は依然として軟式庭球をしていた・・・という記述がある。(大正9年発行の同志社時報)この年、全国硬式テニス大会が開催される。当時のボールに関する記述を少し紹介すると、川廷善一郎氏(1930年 昭和5年卒)談、早稲田の三神八郎がやってきて、もう軟式やったらあきません。これをやりなさいと言ってシュラゼンジャー(Slazenger)の硬球を持ってきて教えてくれた。輸入品のライト&デッドソンも1打18円でとても高価で使えない。その後ダンロップからセントジェームズという名のボールが国産化して発売され、1打6円まで下がった。これがきっかけで全国に硬式テニスが一気に普及した。このように用具の物資事情により、当部は、軟球を使用していた時期があったようだ。

八木千代三(1933年、昭和8年卒)によると1930年台当時、学校体育でテニス部として活動していたクラブは同志社大をはじめ京都大、龍谷大学、高等工芸、三高、関西地区では関学、関大、阪大、大市大、大阪商大、神戸大、甲南大。当時は学生連盟がひじょうに力を持っていて、日本のテニス界全体

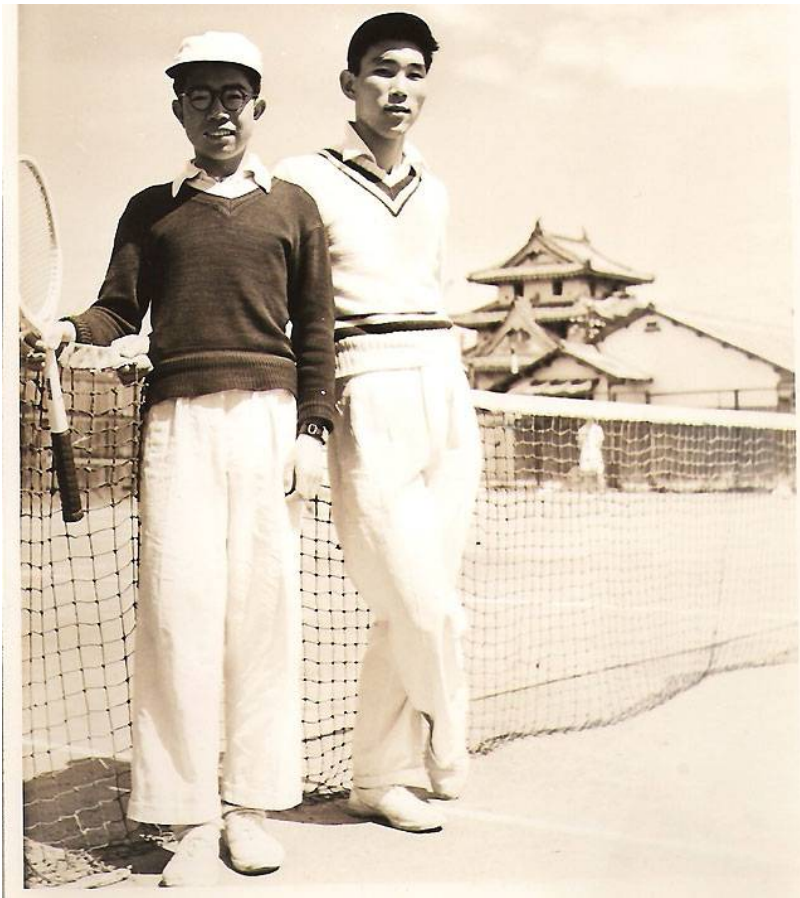
のリードはほとんど学生がやっていた。全日本ランキングを決めるも学生の委員会がやっていた。

今出川キャンパスのテニスコートは1933年(昭和8年)に図書館横の2面あり、さらに北側にもう1面増設され3面になった。

1940年(昭和15年)になると日中戦争から大東亜戦争直前の厳しい状況になって、ボールなど用具も配給が厳しくなった。

ますます戦況が厳しくなり、部員は次々に「学徒出陣」で招集され、1943年(昭和18年)5月、学校からテニス部に解散命令が出された。現役部員は木箱に用具、カップ、賞状を詰め、黒田健一部長に保管をお願いした。OB先輩も多数参加をいただき、いつの日かテニス部の復活を祈念して「解散式」を挙げた。(辻本章 氏(1943年 昭和18年卒) 談)

1945年(昭和20年)8月終戦となり、10月になってそろそろ帰還者の顔が見えだした。残念ながら戦死した者もいた。図書館横のテニスコートは荒れ放題で鍬やショベルで整備するのに、1945年(昭和21年)4月まで掛った。コートができるまで東淀川や京都府立医大の鴨川河川敷のコートなど各地を転々とした。ちなみに再スタートを切った昭和21年当時のテニス部の予算は収入は8,283円、支出が7,709円。テニスコート2面の修繕費が4,842円。島岡博次(昭和21年法卒)、遠藤浩(1950年、昭和25年卒)談。島岡博次氏は1963年昭和38年から1980昭和55年まで18年間、大学テニス部の監督を務め、その後OB会長になった。



【主な練習場は二条城内テニスコート堀内氏個人所有】1961年(昭和36年)まで当時、固定した練習場がなかった。

1959年(昭和34年)、皇太子様(のちの平成天皇)と美智子様ご成婚

「テニスが縁で、当時まだ大衆スポーツではなかったテニス人気が高まる。

1961年(昭和36年)全日本選手権、混合複久保嘉定(同大出)優勝。長い同志社大学テニス部の歴史の中でも、全日本という名の付いたタイトルをとったのは唯一、久保嘉定のみである。

1962年(昭和37年)10月 岩倉に専用コートが完成。(岩倉では1962年～1985年)

1968年(昭和43年)関西学生室内選手権男子ダブルス亀山、奥田組が優勝

同年、全日本学生東西対抗試合、亀山単で代表出場し勝利す

1977年(昭和52年)全日本学生東西対抗試合、大谷荘二、柴垣行男組代表出場

1981年(昭和56年)川廷栄一氏(昭和31年卒)が国際テニス連盟(ITF)理事に就任

1984年(昭和59年)関西大学対抗リーグ戦男子 初優勝

1985年(昭和60年)関西大学対抗リーグ戦男子2連覇

全日本大学対抗王座決定試合 4位

1985年(昭和60年)関西リーグ2連覇祝勝会の折、川廷栄一氏が親交の深いオーストラリアテニス協会会長夫妻を帯同して来られ、会長が壇上でスピーチされる時、川廷氏はその傍らで通訳されて、共に挨拶されたことが印象的であった。海外帰国子女を受け入れる同志社国際高出身の学生が、流暢な英語で豪テニス協会会長と談笑するシーンなども見かけられ、同志社テニス部もグローバルになったものだと感嘆した。

1985年(昭和60年)12月1日「フェアウェル岩倉」開催 OBOG が岩倉テニスコートに集い、最後の日を惜しんだ。

1986年(昭和61年)3月京田辺校地へ移転 同志社大学京田辺キャンパスが開校し、体育施設も京田辺へ全面移転した。テニス部にとって長らく慣れ親しんだ岩倉の地を離れ、練習の地は京田辺へ移った。

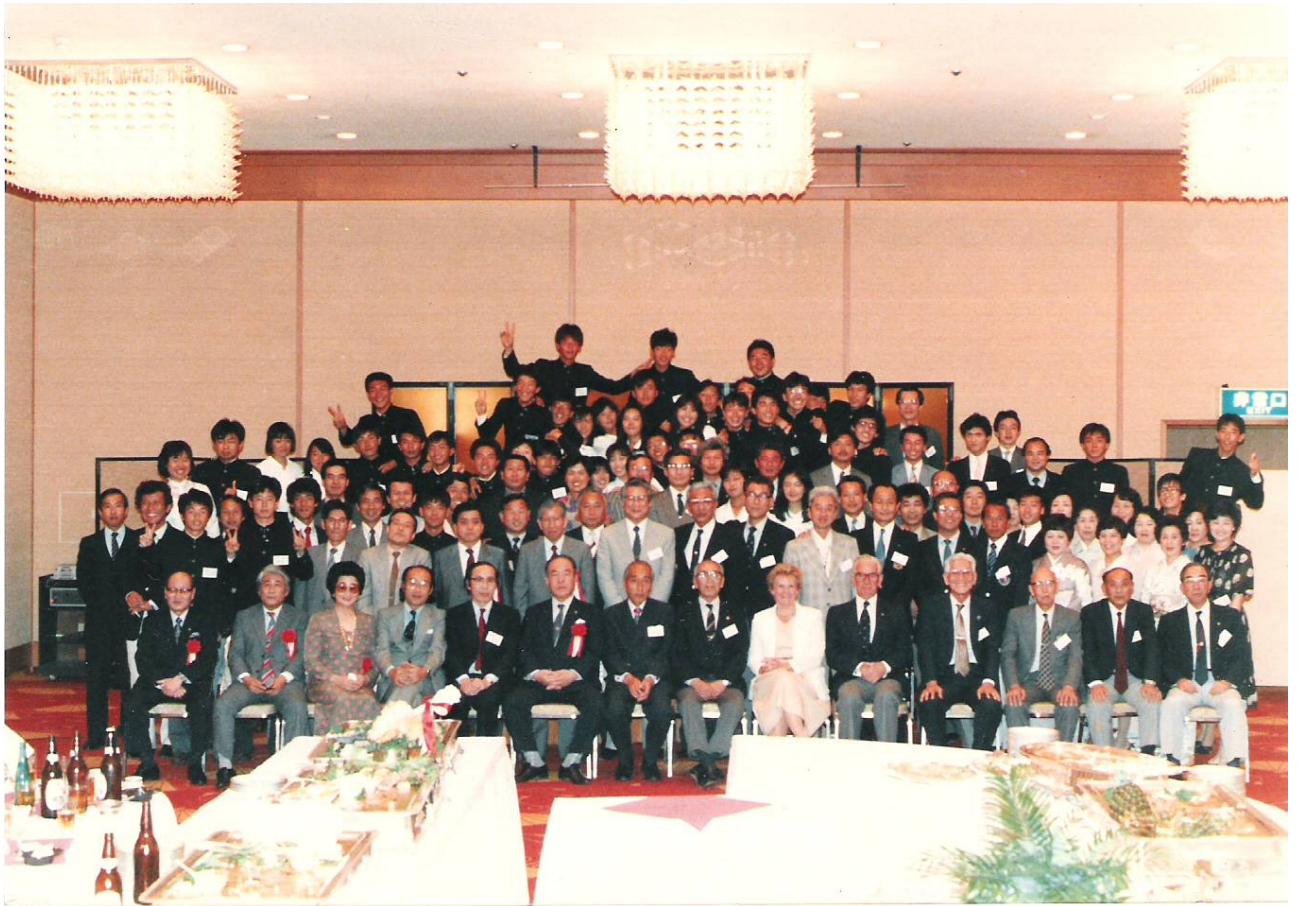
1986年(昭和61年)校祖墓参始まる 1月、若王子山頂、校祖新島先生の墓へ参り、チームの飛躍を誓う。この年から始まった校祖墓参は以後、テニス部の恒例行事となっている。また、校祖墓参当日、学生部員と OBOG は同時に若王子参道周辺地区の清掃活動を行っている。

1988年(昭和63年)～1991(平成3年)関西大学対抗リーグ戦男子4連覇

全日本大学対抗王座3位



「フェアウェル岩倉」



- 1988年（昭和63年）全日本学生男子単加藤正二3位
- 1989年（平成1年）川廷栄一氏(昭和31年卒)が総監督に就任
- 1990年（平成2年）海外遠征、韓国明知大と対抗試合、大学国際交流
- 1991年（平成3年）関西学生新進トーナメント**女子単**良元由佳優勝
全日本大学対抗王座決定試合3位
- 1992年（平成4年）全日本大学対抗王座決定試合3位
- 1993年（平成5年）全日本学生東西対抗 吉岡青樹選抜
- 2000年（平成12年）全日本学生選手権男子複内田、角田組準優勝

（ほか戦績詳細は年表参照）



【2015年(平成27年)1月25日の校祖墓参】 個人所有 金井健撮影

◆創部100周年記念事業

- ・2005年(平成17年)3月5日 同志社大学体育会テニス部創部100周年祝賀会を開催した。同志社OBOGをはじめ日本のテニス関係者が一堂に集まった。
- ・テニス部記念誌「百年の系譜」発刊



【創部100周年祝賀会 写真は川延栄一氏のインタビューの場面】100周年委員会撮影

◆全同志社総長杯始まる

2011年(平成23年)12月15日同志社大学体育会テニス部の呼びかけで、法人内の全同志社中学、高校テニス部選手が京田辺テニスコートに集結し、男女カテゴリーごとの対抗戦を行うもの。総長に四杯をご寄贈いただき、「総長杯」という名の冠大会を開催。選手、関係者総勢300名規模で、毎年12月に開催する恒例の一大イベントとなった。



◆2005年(平成17年)3月発刊 テニス部「百年の系譜」の編集後記を記す

実行委員会で資料を集めているうちに「テニス部の歴史は本当に80年なのだろうか」という疑問が次々に湧いてきました。

まず、創部80年説の根拠になっている「1923年発足」にしても「同志社スポーツの歩み」では「1920年にテニス部発足」となっているなど、さまざまな説があることがわかりました。さらに同志社の文献を整理していくうちに驚くような事実が判明しました。

1904年(明治37年)に「庭球部予算が配分された」記録が出てきたのです。また、1905年(明治38年)には「同志社運動部規定が制定され庭球部が公認」されたことも判りました。

80周年が根底から覆される数々の資料を前にして、実行委員会の議論は白熱しました。

OBOG会役員会を開き、同志社大学テニス部の創部は「同志社・運動部規則が制定され、庭球部が公認された1905年とする」ことを全会一致で承認可決されました。

「創部80周年記念事業」は「創部100周年記念事業」に切り替わりました。堀江照二(昭和)100周年史編集委員長のもと綿密な会議を重ねながら、編集に当たり始めました。

明治時代初期からテニス部の前史など歴史に埋もれていたテニス関係の貴重な記述は、当時、同志社大学社史資料室長の谷口宇平(昭和42年卒)OBに担当していただきました。谷口氏は膨大な資料や写真の中から、後学のために大いに役立つ内容が書き上げられました。

(中略)

テニス部前史とともに注目していただきたいのは「座談会」です。故八木千代三OB(昭和8年卒)が田村英成OB(昭和36年卒)と長い時間と熱意を傾けて収録された原文を、坂本裕治(昭和23年卒)、浦澤昭(昭和33年卒)、辰巳彰(昭和36年卒)らのOBと現役(当時)の今西舞子(平成18年卒)さんに、わかりやすく原稿化していただいた。

記録については松田英夫OB(昭和42年卒)が中心となって、各年代ごとに責任者を決め、とてつもない量の戦績記録を整理してくれました。

この記録集は今後50年、100年経ったときにも貴重な資料として役立つことでしょう。

と藤弘道氏(昭和39年卒)は記している。

「記念誌」発刊に至るまでにはその草起からしばらくの中断期間があり、実質三十年の歳月を要したことになる。しかし、それだけ年月を要したことがかえって功を奏した。前出の年代刻みの「座談会」は1986年(昭和61年)に開催され、当時ご健在であった八星徳逸氏(大正15年卒)、川廷善一郎氏(昭和5年卒)、八木千代三氏(昭和8年卒)の現役当時の貴重な話の内容が収録されており、テニス部史を紐解く、大きな手がかりとなったことは間違いありません。

このように、同志社大学体育会テニス部は今年で創部114年を数え、同志社大学のなかでも最も長い歴史と伝統を持つ体育会クラブの一つと言っても過言ではありません。

◆川廷栄一(かわてい えいいち 1933-2013)。



テニス部の歴史を語るうえで、この人を外すわけにはいかない。

同志社大学テニス部から日本のテニス界へ、アジアテニス界さらに世界のテニス界に影響を与えたOBが居た。

昭和後期-平成時代のテニス写真家、日本、世界テニス界功労者。1956年(昭和31年)卒

現役時代、同志社大学体育会庭球部、主将として活躍

父、川廷善一郎氏 1930年(昭和5年)卒は同志社庭球部の黎明期を支えた人だが、その父の影響もあり、川廷栄一は同志社大学の門をたたいた。

同志社大学時代は全日本テニス選手権に出場。大学卒業後、家業の繊維会社に勤務し、傍ら1961年(昭和36年)母校テニス部の監督を務めた。1968年(昭和43年)からテニス写真家として国内外の試合を取材。日本はもとより、世界の4大会(全英、全豪、全米、全仏)へ出かけ選手の

写真を撮り続けた。1979年以降は連盟活動に専心。アジアテニス協会、国際テニス連盟など多数の役職を歴任。1984年のロサンゼルスには公開競技としてテニスが採用、さらに正式競技としてソウル五輪から復帰に尽力し以降、ITFオリンピック担当理事として北京大会まで5回のオリンピックテニス競技運営を担当した。

1978年(昭和53年)日本庭球協会理事、副会長を歴任、1981年(昭和56年)国際テニス連盟(ITF)理事。1989年(平成1年)アジアテニス連盟会長。1991年(平成3年)ITF副会長。1993年(平成5年)日本オリンピック委員会(JOC)理事、2003年(平成15年)同副会長。一方、母校では、1989年(平成1年)から1990年(平成2年)テニス部監督、1991年(平成3年)~1992年(平成4年)総監督を務め、その間、国際的な人脈を通じて、同志社大学チームは韓国へ遠征し、明知大、延世大と交流試合を行った。

テニスの普及に尽力し、2005年(平成17年)ゴールデン・アチーブメント賞を受賞し国際テニス殿堂入り。2012年(平成24年)国際オリンピック委員会功労賞(IOC)五輪オーダー(功労章)を受賞。また、長年の貢献により、オールイングランドテニスクラブ(ウィンブルドン)名誉会員に推挙される。2006年(平成18年)11月3日旭日中綬章、2013年(平成25年)8月3日永眠。享年79歳

カメラマンとして世界のテニスを日本へ

川廷栄一のテニス人生の始まりはフリーのカメラマン。同志社大学テニス部では主将としてプレーした後、家業を継いだものの、テニスへの想いは捨てがたく、写真家の道へ。カメラ機材は今とは異なるフィルム時代である。国内での撮影をはじめてほどなく、1968年(昭和43年)、日本プロテニス界のパイオニア、石黒修がオーストラリアへの遠征を計画し、川廷を誘った。海外の本格的取材を望んでいた川廷は即答。このころの川廷は、かつて新島が単身アメリカへ渡った頃の姿に重なる。1968年

は全スポーツ界にとって画期的なオープン化が実現した年。テニス界ではそれまでアマチュア大会として開催されていたグラนด์スラム大会は、アマチュアとプロの垣根がなくなったのである。川廷は、オープン化で激動する世界のテニス界取材し、スポーツ誌を通じて、情報を発信し続けた。1975（昭和50年）年、澤松和子（現吉田）とアン清村によるウィンブルドン女子ダブルス制覇の瞬間写真をはじめ、発信し続けた。

● 芦屋の川廷宅で歓待された世界のトッププレーヤーたち

1933年（昭和8年）、川廷は兵庫県芦屋市で生まれた。父、善一郎氏が清水善造（日本テニスの黎明期を築いた名選手）と懇意だったことから、自宅コートにはデ杯選手などがよくテニスをしていた。高校時代は松岡功（元デ杯選手。松岡修造の実父）に負けたことがないというのが川廷の自慢だった。芦屋の自宅にはこぞって、世界のトッププレーヤーやテニス関係者がやって来て、川廷宅で食事をした。

● 世界のテニス大会運営に関わる

川廷はやがてテニスの協会組織や大会運営に興味を抱くようになる。そして、一写真家の領分を越えて、国際テニス組織に関わることになる。

「アジアに種をまき、理想のピラミッドを目指す」国際テニス界のオープン化以来40年間に、約75ヶ国・地域へ400回の海外出張をし、600の競技大会や220回の会議などに従事してきた。これらの仕事を続けてきて、川廷にはある時期から自らの考えが固まってきた。世界のテニスには様々な形がある。満足なラケットやボールすらない段階から、高額賞金が賭けられたトップクラスまで、すべてみんなテニスなのだ。川廷の目的はテニスの裾野を広げ、発展させていくこと。ただ、心の中では、開発途上国の子供たちにスポーツで希望を与えたい。コートも何もない国に行って「テニスというスポーツを知っていますか。一緒にやってみましょう」と、種蒔きをする。その芽の育つ過程が楽しくて、やりがいを感じるという。1995年（平成7年）頃、世界のテニス連盟の中で、アジアが最も理想的な道を歩んでいるという評価が生まれつつあった。伝統のあるヨーロッパと違い、アジアのテニスはレベルが様々で対応が難しかったが、それがその頃から徐々に実りつつあった。川廷は、働いてくれるアジアの若者たちにいつもこう話していた。「僕らの時代というのは、近代テニス100年の歴史に乗った10年、20年で、そこからまた無限に続いていく。このわずかの期間をテニス史に良い時代として残せる仕事をしよう」と。アジアのテニス界はこの20年間に発展したのだと言われれば、それだけで本望だ。各国でテニスの競技人口が増え、世界トップレベルの選手を頂点として築かれたピラミッドの中には、プロもいればアマもいる。あらゆるテニスがその中にある。という形が川廷の抱いた理想だった。



五輪オーダー授与式：中央川廷氏 JOC 竹田会長 国際テニス連盟のリッチビッティ会長も駆けつけた川廷尚弘氏所蔵